

迎春

明日にときめき、大きな夢に挑戦する一年に！

東雲中学校陸上競技部顧問一同

「絆」とは？ そして「夢」とは？

糸電話を知っていますか？ 実際に糸電話をしたことありますか？ 紙コップの底にセロテープかなんかで糸を貼り付けて、ピンと糸を張った状態で紙コップに口をつけて話をすると、もう一方の紙コップに電話のように声がちゃんと伝わるのです。音の振動とかそんなむずかしい話は置いて、小学生のときには結構感動したものです。糸電話は互いに強く引っ張りすぎると、糸が切れてダメになってしまうし、逆に全然引っ張らないで糸がたるんでしまう状態になるとまったく聞こえなくなってしまいます。この「糸」という字が漢字のヘンに使われているのが、未曾有（みぞう）の大震災があった2011年の漢字にも選ばれた「絆」という文字。これは、朝日新聞の受け売りですが、ツクリの「半」という文字は、「糸を半分ずつ（両側に切れないで）引っ張る」という意味があるそうです。先ほどの糸電話の理屈と同じで、互いの距離感や強さや弱さを加減して思いやる意味があり、双方が自分のことしか考えていない状態で好き勝手な方向に向いている状態では「絆」は存在しないそうです。

その「絆」の言葉がぴったりくるのが、駅伝のたすきであり、リレーのバトンである。たすきやバトンを「つなぐ」ことは、決してひとりではできない。さらに、渡し手の思いとそれを引き継ぐ受け手の気持ちは、「つなぐ」という言葉よりも「たくす」という言葉の方が適切になるかも知れない。チーム単位で考えると、駅伝やリレーには終わりが無い。歴代の選手たちの駅伝やリレーに対する熱い思いが積み重なって、無形の力が選手の背中を後押しする。ここまでくると、一本の棒や一枚の布が、「絆」にまで昇華する。この絆は実際に走った選手だけではない。補欠はもちろんのこと、チームメイト、支えてくれた多くの人の思いも綴られながら、終わりのないらせん階段を登るように未来への夢に向かうのだ。

「夢とは目先の損得勘定なしに、自分のすべてを賭けて挑戦して成し得たいと思えること」と自分は定義する。ただし、夢を成し遂げるために、手段を選ばず何をしてもいいと言うものではない。ひとりの夢がそれと関わる多くの人に支えてもらいながら、あるいはその夢がまわりの人も巻きこんでシンクロしながら、いわゆる運命共同体のようにとんとんふくらんでいくのが夢の正しい進行形ではないか。「感謝」の言葉なくして夢実現はありえないのだ。

2011年7月24日大阪中学校選手権初日。当時、日本中学ランキング2位の記録を持つ東雲女子リレーチームが夢を賭けて勝負した日。茨木西中時代で懇意にいただいた保護者の方が、仕事の合間にわざわざ万博記念競技場にまで足を運んで応援に来てくださった。（この方は当時の部員といっしょにバザーで店を出して、その売上げのお金を元にあの茨木西の「夢無限大」の横断幕を作ってくださいました方です。）「先生おめでとう。東雲のリレーすごかったな。スタンドの応援も、一番まとまって応援してたのも東雲やったで」と、ニコニコしながら祝福してくださった。さらには、この正月に届いた1枚の年賀状を見て驚いた。茨木西時代の部員で、今は神奈川県で小学校の教師をやっているNである。「いつも、ホームページを見て先生を応援しています。7月に職員旅行で京都にくる機会があって、2日目は自由行動だったので、あの日万博競技場に東雲のリレーを見ようと思い、万博競技場に行きました。僕は東雲のリレーチームが日本で2番目のチームであることももちろん知っていましたが、（北口先生に）迷惑をかけてはいけないと思い、ひとりで応援していました……。」準決勝で100分の7秒差に3チームがひしめく激戦を勝ち抜いたのは、選手のがんばりはもちろんのこと、チームメイトの応援、保護者、さらには自分にかかわっていただいた多くの方々の熱い思いも後押ししたからに違いないと思っている。

2012年。今年の東雲中陸上部の大きな目標のうちのひとつは、「千葉全中で、リレー日本一になること」である。この目標はリレーメンバー6人だけの目標ではなく、歴代の東雲中リレーメンバーの悲願でもある。この目標を達成するためにも、いや達成すること以上にもっと大切なことがある。それは、「ひとりひとりの部員が、それぞれの目標に向かって生き生きと輝いて陸上競技に取り組むこと。ひいては、互いに励まし合い、支え合い陸上競技を通して、大きく人間的にも成長すること」である。いわゆる「ONE FOR ALL, ALL FOR ONE. (ひとはみんなのために。みんなはひとりのために)」の精神である。この目標が達成できなければ、「リレー日本一はありえない」と、何度も強く心に刻む年の始めとなった。

最後に、ひとりひとりを大切にするためには、陸上競技に取り組む姿勢において、互いにリスペクト（尊敬）できる関係でなければならない。決して他人まかせにするのではなく、失敗を怖れず堂々とそれぞれの夢に真正面から挑んでいきたい。そうすれば、東雲中陸上部は本物のチームになるはずだ。

